

---

# 僕は馬鹿

滾

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕は馬鹿

### 【著者名】

N-1-2830

滾

### 【あらすじ】

作者の体験談。男性とぶつかつてから、とんでもないことになります。

(前書き)

作者の体験談です。そういうのが嫌いな方は見ない方がよろしいか  
と。

僕は月に一回位の確立でカラれます。

人相の悪い人達にカラれます。

友達には「お前も相当悪いよ」と言われますが気にしません。

ある時は突然後ろから現れた茶髪のお兄さんに、携帯電話を奪われて目の前で真っ二つに圧し折られました。

またある時は、歩道を歩いていたのにもかかわらず、後ろから現れたオートバイに乗った見知らぬお兄さんに「（本名）、金貸してくれよ」と財布を持っていかれたりしました。勿論その後取り返しました。未だにあの人人が何で僕の名前を知っていたのか解りません。

かく言う僕も中学時代は相当腐っていたので、問題のネタの元凶が僕にある可能性も否定できませんが。

そんなこんなで、僕の身の回りではそういう“ネタ”になる出来事がつきません。

なので、もうヤケクソという事で、その中でも面白い話を一つ皆さんにお届けしたいと思います。

あれは今から二年前の事です。

僕はあの頃親戚の家によく出入りしていて、あの日も僕は親戚の家でのんびりトランプでもしていたのです。

が、いい加減一時間に及ぶババ抜きに嫌気が差した僕は、親戚の家の周りを散歩する事にしました。

親戚の言えども、言つてみれば未知の土地です。

家には行っても、その周りを見てみる機会はそれまでありませんでした。

休日に山を見て回ると言つお年寄りのような趣味を持つていてる僕でした。

す。散歩をするのに抵抗なんてありません。むしろ鼻歌交じりです。そんなこんなで親戚の家を出、僕はトコトコとポケットに手を突っ込みながら家の周りを徘徊し始めました。

散歩を始めて五分ほど経った時だつたと記憶しています。

目の前に然程大きくない交差点が目に入りました。

交差点というか、車一台が通れる道を交差させただけの、信号も無い道です。

僕はそこを、カーブミラーを確認することなく渡ろうとしました。確かにそれは僕が悪かったかもしませんが、実際、歩きでカーブミラーを見る人も少ないのでしょう。

交差路へと歩を進めた時です。

ドンッ

と、僕の体の右側に、何かがぶつかりました。

それが“人”だと気付くのにそんなに時間是有する事なく、「あ、すいません」と、僕は軽く頭を下げてその場から去ろうとしました。すると、僕の後ろから声がしたのです。

この声を、僕は一生忘れません。今から一年前の事なのに、今でも鮮明に覚えています。

声は、こう言いました。

「どこみれつてんだおらああッ！」

忠実に書いたつもりです。確かに僕の耳にはそう聞こえました。

『どこみれつてんだおらああッ！』。多分「どこ見てんだコラ」と言いたかったのを、いい間違えたか何かしたのだと思います。

僕は思わず後ろを振り返りました。

ああ、ガラの悪い人が仁王立ちしているのだろうな・・・。

そんな考えを頭に、振り返った先。

「？」

そんな人は居ませんでした。

ただ、一人普通の男性が立つて いるだけです。その男性というのも、一クラスに一人は居るような、窓際で一人で座つて いるような人で す（失礼ですが）。

歳は僕と同じか、少し上くらいの人でした。

え？

この人が言つたの？

僕の頭は一瞬混乱しましたが、その人がアカラサマに僕を睨みつけているので、“ そう”だと理解できました。

男性はもう一度言いました。

「どこ見てんだ」と。

今度はしつかり言いました。

改めて聞いて思つたのですが、その人の声と言葉とでは、やはりギヤップがありました。

とても、普段そんな事を口にしなさそつな人なのです。

何がこの人をこんな風に・・・？僕はそんな厄介なぶつかり方をしたのだろうか・・・？

考えながら、ふと、その男性の後ろに目をやると、

あ。

原因発見。

恐らくその男性の彼女だと思われる、一人の女性が立つていました。

女性は不安そうな顔で、「やめようよ・・・」とか、「ダメだよ・・・

・」と男性を抑えようとしています。

そこで僕は“ピーン”ときました。

つまり、この男性はこの女性に、“強いところ”もしくは“カッコイイ（人にカラむ事がカッコイイとは思いませんが）”とこを見せたいと思つたのでしょう。

確かに、男性も緊張して いるような顔をしてなくもなかつたです。

なので僕は、

「あ、本当にスミマセン」と深く頭を下げました。

本当に深く頭を下げました。

男性に華を持たせる感じで。

そしてもう一度その場を去りました、その時、

僕の推測ですが、男性は思ったのでしょうか。

『コイツなら“イケる”！』と。

『コイツなら、彼女の前でかっこいいところを見せるための、糧に

できる！』と。

男性は僕に向かって叫びました。

「待てコラー！」と。

僕は少し堪忍袋の緒を緩めつつ、

「はい？」

と振り返りました。

すると、男性は突然、

「金を出せ」的な事を言い始めました。

一つ言つておくと、僕がその時歩いていたのは、そこそこお金を持つている人達があつまる住宅街でした。だから、そこを歩いているその人達は、確実に僕よりもお金を持っているという事です。

何でそんな人達に僕が金を？

そう思うと若干腹が立ちましたが、もう男性の彼女が半分泣きそうになっていたので、

「スマセン、今持つてないんです」と僕は笑顔で答えました。すると男性は僕の腰の低さに気を良くしたのか、その後もぐいぐい僕に突っ掛かってきました。

その都度、僕なりの“柔軟な態度”で対応をしていましたが、そのやり取りを二回ほど繰り返すうち、段々僕もいい加減腹が立ち始め、

四回目の男性の言葉に、つい、

「ああ？」

と語調を荒げてしまったのです。

すると男性は若干怯みながらも、彼女の手前引くことも出来ず、「何だよ！」と強気な対応を見せてきました。

が、もう「ああ？」と言ってしまったので、僕も引くのは嫌になり、「あんまり調子に乗つてはいけませんよ？」的な事をその場の空気についた語調で男性に伝えました。

、とるす

何を思つたのでしょうか。食われるとでも思つたのでしょうか。

男性は突然、「う、うわあああ！」と声を上げながら、僕の左頬にパンチを見舞つてきたのです。

ええ・・・ッ！？

当たる瞬間にそれなりに顔を動かしましたが、それでも結構な力で殴つてきたらしく、歯が若干欠けました。今でも欠けたままで。

殴られた体勢のままで、恐らく三秒ほどの間がありました。

僕は顔を右に向けたまま、痛む頬を気にも留めず、心の中で葛藤していました。

ダメだ怒っちゃダメだ男性には彼女がいやしかし殴られたしないやいや彼女がいるんだからでも殴られてんのよここは堪えないといやいや結構頬痛いってばいやしかし・・・。

そんな事を考え、湧き上がつてきた怒りを抑えようとしたときです、

ふと、男性の彼女が目に入りました。

男性よりも少し低い背をした女性です。厳密に言えば160cmくらいでしょうか。結構キレイな顔をした方です。髪も長く伸びて、清楚な印象を受けます。

そこまで考えて、  
何故でしょう。

怒りが再燃してきました。

そして、

「つんだらボケエツ（解明不可）……」

男性のお腹に右ストレートをば一閃（正当防衛です）。

「げろっぱ」的な声を発しながら、男性は地面に膝をつきました。  
「ううう・・・」と軽いうめき声が挙げながら、お腹を抱えて蹲つてしましました。

そんな男性に寄り添うように、或いは男性を庇うように、女性が僕と男性の間に入り込みました。

男性の隣に座り込み、男性を抱きかかえるようにしています。もつ、号泣します。

そして、

「ゴメンナサイゴメンナサイ、許してください・・・」と嗚咽交じりに謝罪してきました。

何でしょう。

今から冷静に考えると、あの構図はビームからビーム見ても僕が悪者で

す。

正義の味方があの状況を見たら、絶対に向こうつの味方をするはずです。

だつてあの状況を僕が客観的に見たら、絶対に向こうつの味方します。警察の方が来たのなら、間違いなく僕が捕まります。

なんなら、僕が笑い声を上げて彼女さんを連れ去つてもなんら違和感ありません。

しかし、

あの時の僕は馬鹿でした。

あの状態にありながら、

何故か“自分に酔つて”いる状態になつていたのです。

多分、『これで二人の愛は深まるのだろう』的な事を考えていたのだろうと思います。

もう、僕の中では“僕=恋のキューピッド”という図式ができてしまつていたのです。

傍から見たら、恋のキューピッドどころか、ただの鉄の弓矢を持った狂人なんですが。

しかし、酔つている僕はイタさ爆発です。

何故かその時、『捨て台詞を残してこの場を去る』と考えたのです。

そして僕は考えました。

どんな台詞がカッコイイのだろう?と。

彼女に「彼氏をしつかりと見張つとけ」的な事が言いたかったのですが、あまり長くなると噛んでしまいそうだったので、それを短く完結に、とあれこれ考えた結果、僕の口からでた一言は、

「縛つとけ」

でした。

もはや意味が解りません。

ただの変態です。

『縛つとけ』って、何ですかそれ・・・。

しかし僕はもう止まりません、踵を返し、振り返ることなくその場を後にしました。

そうです。面白い話。面白いのは僕本人です。  
今回は戒めのつもりでこの話を書きました。

きわめて、実話に忠実です。

つまり、僕は馬鹿、というお話です。

笑ってください。

できれば、盛大に・・・。

(後書き)

この話の一年後、つまり去年、僕はこの男性と彼女さんと、偶然再会しました。その話はまた次回。といふ事で。

楽しんで頂ければ幸いです。どうか盛大に笑ってやってください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1283c/>

---

僕は馬鹿

2011年2月2日02時53分発行